

蒲生先生、いつも一生懸命な姿をありがとうございました。 いつまでも忘れません。

吉田 ゆり子
YOSHIDA Yuriko

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

Quadrante, No.24 (2022), pp.18–20.

新型コロナウイルスの蔓延で、外出もままならず、大学で先生方に廊下で会ってお話することもなくなっていた。蒲生先生にはしばらくお会いできないまま、訃報に接することになった。あまりの衝撃に、大川先生と真島国際社会学部長、富田研究院事務課長等に状況確認をした後、4月2日に、下記のようなメールを全学教員に向け、また富田課長を通して職員の方にも送っていただいた。

＊ ＊ 2021年4月2日付メール ＊ ＊

皆さま

去3月26日、蒲生慶一先生が急逝されました。

あまりに突然のことで、そのご訃報を事実として受けとめることができずにおりました。

難しいご病気を抱えながらも、4月からの授業のこと、学生たちのことを、心配されておられたとうかがっております。

外国語学部の時代から、複雑なカリキュラムを何とか学生に分かりやすく示すことができなかつたか、ゼミ選択をうまく進めることができなかつたか、カリキュラム運営や組織改編など、さまざまな工夫をし、苦心をしてくださいました。

朝から夜おそくまで研究室でお仕事をされ、多くの学生たちも出入りする研究室でした。

近年は、大学の点検評価のお仕事に携われ、たいへんご尽力をされておられました。

長く同僚として、仲間として、多くの苦難をともにしてくださった蒲生先生に、感謝の気持ちを込めて、心からご冥福をお祈り申し上げます。

ご葬儀はご親族で執り行われたとのことですが、お香典という形ででも、せめて私たちの哀悼の気持ちをご霊前にお届けできればと思っております。

このような形で哀悼の気持ちをお届けすることにつき、もしご賛同いただけますようでしたら幸いです。

どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

＊ ＊ ＊

この呼びかけに応じてくださった教職員からの哀悼のお気持ちを、神奈川県辻堂のご霊前に届け、ご遺族である妹さまからお話をうかがい、そのご報告を次のように送らせていただいた。

＊ ＊ 2021年4月27日付メール ＊ ＊

皆さま

蒲生先生のご急逝に対し、たいへん多くの方々からご賛同と哀悼のお気持ちをお示しいただき、ありがとうございました。

昨日4月26日、蒲生先生のご遺骨が安置されておりますご遺族のお宅をお訪ねしました。皆さまのご署名126名分をお持ちし、「東京外国語大学有志一同」としてお香典12万円とお花とお菓子をお供えさせていただき、蒲生先生のご冥福をお祈りし、これまでともにお仕事をさせていただいたお礼の気持ちをお伝えするとともに、これからゆっくり休んでいただき、そして私たちを見守っていただくようお祈りをさせていただきました。

ご遺族から、蒲生先生のご病気と倒れられるまでのお話をうかがい、皆さまにご報告をさせていただくことをお許しいただきました。

蒲生先生は、特発性門脈圧亢進症という難病と診断されておられたとのことですが、急速に容体が悪化されたのは2020年12月終わりからとのことでした。

2月26日から入院治療されたものの、3月上旬には無理をおして退院され、入試や4月からの授業準備に大学に出てこられていたということですが、卒業式にはいらしておられませんでした。

3月25日にご自宅で吐血して倒れられていたところを発見され、意識不明のまま、翌日にご他界されたとのことでした。

ご遺族である妹様には、蒲生先生が大学で多くの学生の面倒をきめ細かくみてくださっていたこと、ご自身のことよりも大学のお仕事に全力で取り組んでこられていたことなど、私の知る蒲生先生のお姿をお伝えしましたところ、お兄様の別の顔を見ることができたと、喜んでいただくこともできたようでした。

また、これだけ多くの皆さんからお兄様が大切にいただいていたのだと、たいへん感謝され、皆さまにお礼をお伝えしたいとおっしゃっておられました。

そのお気持ちを、皆さまには、こうしたご報告の形でお伝えすることをお約束して参りました。

皆さま、このたびはご賛同いただきありがとうございました。

また、研究院事務課富田課長をはじめ事務室の皆さまには、お力添えをいただき、ありがとうございました。

* * *

その後、蒲生先生以外はそのままの姿で遺されていた研究室を、大学文書館倉方研究員のお力で、写真とスケッチによる現状記録を詳細にとりながら、遺品や図書の一つ一つをコンテナに収納する作業を行った。そして、図書に関しては、国際社会学部学部長経費でリスト化し、それ以外の遺品と、辻堂のご自宅に遺された図書や遺品については、大学文書館でリスト化を行った。蒲生先生の教育と研究の足跡を検証し伝えてゆくために、これらを総合した蒲生慶一研究者アーカイブズを構築し、3月26日の一周忌にあわせ、その目録をご遺族にお届けし、公開のための整備を行うことにしている。

思い起こすと、蒲生先生が東京外国語大学に着任された当時、学部は外国語学部一つであった。95年改革を経て、入学から卒業までの教育組織も教員の張付も語科単位であった体制は変更され、入学は語科単位ながらも、3年次から三つのコース（言語情報・総合文化・地域国際）に別れて専門課程を経て卒業する制度となっていた。ところが、コースで開講される授業は、それまでの語科の授業や、いわゆる語科に所属しない、いわゆる教養科目を担当した教員の提供する授業で、膨大な数となり、それらが体系化されないまま学生に提供されていた。そのため、何とか専門課程で開講される講義や演習を体系化し、わかりやすい履修指導をおこなう体制づくりが大きな課題となっていた。そのコースのカリキュラム編成の議

蒲生先生、いつも一生懸命な姿をありがとうございました。いつまでも忘れません。

論を、地域国際コースで膨大な実務作業とともに尽力してくださっていたのが蒲生先生であった。

ただ、このカリキュラム編成作業は、意見対立をとまなうもので、対立する考え方をいかに調整することができるかという問題を抱える、かなり困難な仕事であった。すなわち、地域を全面に出して整理しようとする考え方と、ディシプリンを全面に出して整理しようとする考え方の二つがあった。この対立する考え方は、いわば東京外国語大学の宿命のような議論といえるが、結局、両者を組み合わせる方策として、マトリックスを構築することを模索し、整理を進めようとした。ややもすれば教員が対立してしまうことになるぎくしゃくしがちな人間関係の中で、あくまでも、学生にわかりやすいカリキュラムを提供し、有効な科目の履修を促進することに目標をおくことだと自分たちに言い聞かせながら、キーワードや履修ガイドの冊子をつくる必要があると考え、冊子づくりやゼミガイダンス、ゼミ選択の手順を考え、それらの運用も開始した。

この作業を担う教員は、大学の公式な委員会に位置づけられていないため、たいへんな労力と時間を費やしながらも、いわば縁の下の力持ちとして、報われないことも多かった。そうした仕事と膨大な作業に対し、多くの熱意を注いでともに行ってきた仲間として、地域国際コースの教員にとって、私にとって、蒲生先生の存在はとても大きなものであった。

その後、言語文化学部と国際社会学部への2学部化におけるさまざまな議論や軋轢、自己点検評価作業でのたいへんなお仕事の中に注力される姿をみてきた。大会議室で行われた教授会では、一番奥の窓際の机のない椅子に座り、ときに私がすわる椅子の背後から、頭を振りながら蒲生先生が話しかけてくれる姿と声を思い出す。私が国際社会学部長として学部

長室にいるときも、夕方おそくに部屋にいらっしやることがしばしばあり、いろいろな情報を教えてくれ、また、率先して新しい取組に協力を申し出てくれた。

最初に吐血されたことを聞いて、廊下で体調をうかがい、煙草を止めるようにと強く言ったにもかかわらず、自分は難病だけれど煙草とは関係ないと、聞き入れてくれなかった。その後、特別研修、コロナと、ほとんど大学に行かない日々のなかで、蒲生先生に会えないまま、逝かれてしまった。とても残念でならない。聞き入れてもらえなくとも、もっと強く健康のことを留意するようになっておけばよかったと悔やまれる。

ときに落ち込む姿を目にすることもあったものの、いつも学生のこと、教育のあり方を改善するためにと、次々に自身をもっておられる力を精一杯注ぐ、そうした一生懸命な蒲生先生の姿を、いつまでも忘れない。

蒲生先生、どうぞゆっくりお休みください。

(2022年3月11日記す)